

福祉系対人援助職養成の現場から

65

西川 友理

子どもに、言うことをきかせないと！

「いや、そりゃね、もちろん子どもの意見は聞きますよ。でも、やっぱり子どもに言うことをきかせることは大事だと思うんですよ。」

という学生。

「言うことをきかせるってのは、どういうことを指すんですか？」

「ええっと、だから、あの、やらなきゃいけないことはやらなきゃだめっていうことを教えることです！」

「じゃあやらなきゃいけないことを教える、でええやん。なんでそれが“言うときかせること”と一緒になるのよ。」

「え、一緒でしょ、それは！」

「えー、一緒じゃないでしょ、それは！」

と、学生と言い合いになってしまいました。

実習中のことを振り返って、学生が発した「子どもが言うことをきいてくれない」という言葉から、派生したやりとりです。

「園の先生の話はちゃんと聞くのに、実習生の話は聞いてくれないんです……いや、わかっています、わかっていますよ、園の先生と自分たち実習生は違うってことは。でも、あまりに違い過ぎて、言うことを聞いてくれなさ過ぎて、思い通りにいかなさ過ぎて、どうしたらいいかわからない…」

この意見、実は保育実習あるあるです。保育所や小学校における実習で、実習生が「うまくいった」という時は、たいてい子ども集団が、実習生の言ったこと、やったことを受けて、実習生の思い通りに動き、活動や生活の流れに引っかかりがなく、滞りなく、ストレスなく、実習生が思い描いていた状況にたどり着くことを指しています。

でも、それは本当に「うまくいった」と言えるのでしょうか。

言うことをきかせられないと、 子どもの安全が保てない！

「言うことをきかせられるようにしないと、事故とか火事とか、緊急の時に子どもが言うこと聞かなかったら大変じゃないですか！」

「いやいやいや、普段そんな緊急じゃないでしょうが！」

「そう！だからこそですよ！緊急じゃない普段から、この先生の話は聞く！って癖をつけとかないと！」

随分「！」が多いやり取りですね…。

このように、子どもに言うことをきかせる理由が「いざというときの安全が守れないから」という人がいます。

しかし、大人の言うことを聞いていれば安全が守れる、ということも言い切れません。そりゃまあ、大人のほうが長く生きている分、経験の蓄積があるから、危機回避をする手数は多く知っている可

能性は高いでしょう。しかし、例えばその子どもが今まさに直面しているいじめや学級崩壊の状況、通っている学校の文化、友人関係、構造、パワーバランス、その中でどう振舞うのが一番生きやすいか…あるいは、大人が行ったことがない場所、やったことのないゲーム、知らないガジェット…等々、大人よりも子どもの方がよく知っていることなんて、山のようにあるのです。そんな中で、大人の言うことが、子どもにとってそんなに正しいと言い切れるかということ、それには私は、自信がありません。

それに、「大人の言うことを聞く」ということのみをライフハックにしていると、本当に緊急事態が起こった時に、大人がいないと自分で判断できなくなるのではないか、という危惧もあります。

いや、それ以前に、そもそも「いざというとき」は日常生活にそんなにたくさんありません。非日常を想定して、そこまで日常に影響させてもいいものかどうか、私には疑問があります。

「ルールを守る」と 「大人の言うことを聞く」を ごっちゃにしない

「人として大切なことや、命の安全を確保するためのルールを理解し、行動できるようにする」、これは大切なことです。

しかし「大人の言うことを聞く」、これが大切な事であるという根拠が、私に

はどうしても見つかりません。

この2つはセットにする話ではないのではないのでしょうか。むしろこの2つを一緒くたにしない、ということがポイントになるのではないのでしょうか。

相手に言うことを聞かせたい という欲望

相手が大人でも子どもでも「相手が自分の言うことを聞いてほしい」「自分の思うとおりに動いてほしい」という思いは、普通に誰もが抱く欲望ではないでしょうか。それを「相手の為」とか何とか言って、正当化しているというケースが、本当は多いのではないかと私は疑っています。

相手が自分の思った通りに動いてくれる、言うことを聞かせられる、相手が一人でもそうですが、相手が集団となると、これは大変気持ちがいいことです。想定範囲にすべてが収まり、場をコントロールできている感覚が持てることは、自分に大きな安定をもたらします。自分が意味ある存在であることを強く意識できることになると思います。これは、実は多くの人にとって、抗しがたい魅力があるのではないのでしょうか。

苦い思い出

そもそも私がこのことにこんなにこだ

わっているのは、自分自身が子どもからその問いを突き付けられたことがあるためです。

「じゃあ俺らはずっと、ずーっと先生の言うことだけを聞いてたらええんやな！先生の言うとおりにしといたらええんやな！」

児童養護施設職員だったころ、5歳のS君に言われた言葉です。

そのセリフの前に何があったか、恥ずかしながら本当に覚えていないのです。とにかく、何か自分の好きに動いていたS君を、私が注意し、そこからケンカになり、大ゲンカになり、売り言葉に買い言葉で、彼から出てきたこの言葉に、よりによって私は、

「そうや!!ここで生活するねんやったらそういうことや！」

と言ってしまったのでした。

言った瞬間「いや、違う」と強く思いましたが、あとのまつり。フン!とお互いそっぽを向いて、話が終わってしまいました。

5歳の子どもに何ということを書かせてしまったんだ私は!という気持ちと、いや、でもこれは、この子の生活と安全を守るためには、言うことをきかせなあかんところや!という気持ちがごっちゃになって、何も言えなくなってしまいました。

翌日、S君に

「ごめん、あれは言いすぎた。子どもは、

言うことかなあかんだけじゃないわ。」と謝ると、S君はえへへへ、と笑って抱きついてきました。S君はこの時、どう思っていたのでしょうか。聞く勇気がなかった当時の私です。

でも、確かにあの時の私は、余裕がなかった。あの発言がどんなやり取りの中から出て来たのか、それすら覚えていないくらい、大変気持ちが焦っていたということは覚えています。うまくできない、うまくやりたい。うまくやる、というのは「その場を統制すること」「子どもが思い通りに動く」ということ。そうしないと、他の職員に「ダメ職員と思われてしまう」。

S君に勢いで言い返したあの瞬間の私は「この子の生活と安全を守る」ことを目的としていたのではなく、「私の思い通りに動け」ということを目的として発言してしまっていたと、今ならわかります。

目の前の人や集団を思い通りに動かしたい、という欲望は、特に思い通りにいかなさや、「こうあるべき」「こうあらねば」という思いにからめとられている時に、囚われやすいように思います。そんな時はもう本当に渴望するかのようになり、相手に言うことを聞かせるスキルを、力を、そして付き従う相手を、求めてしまいます。

特に子どもに関わる職場では「子ども達を統制できないのは、ダメな大人＝仕

事が出来ない奴」と評価されるのではないかと、という謎の強迫観念にとらわれます。

そんな状態で、余裕をもった子どもとのかかわりは出来ません。余裕がないと、周りが見えなくなります。周りが見えないとなおさら、少しでも身の回りを「思い通り」にしたいくなります。

「あの人は私の言うことをきかない」という尊大さ

そもそも、子どもは大人の言う通り動かないといけないのでしょうか。

大人同士の時だったら、「あの人は私の言うことをきかない」というと、その発言をした人に何となく尊大でえらそうな印象を受けるのに、大人が子どもについて「あの子は私の言うことをきかない」という時には、そんなに違和感なく世間的に受け入れられやすいのはなぜなのでしょう。か。「子どもは大人の言うことをきくもの」ということが、当たり前の中だからではないのでしょうか。

私が一番怖いと思うのは、子どもに対して、「私の言うことをきくもの」として扱ってしまうことです。その前提が当たり前になると、忙しさ、余裕のなさから、子どもを粗雑に扱うようになってしまうというタネが、そして子どもが自分の意志を見せて、それが私の意に沿わない時、なぜ私の思い通りにならないのかと思ってしまうようなタネが、私の中に

もあるのではないかと思います。

余裕のある時には「子どもは大人の言うことを聞かなければいけないわけじゃないでしょ」と違和感を持つことが出来ますが、長らく「子どもは大人の言うことをきくもの」文化の染みついた社会で生きてきたものとして、思い通りにいかなさにふりまわされた時、謎の強迫観念に襲われた時には、そんな違和感はかすんでしまい、子どもに「なんで言うときかないの！」という気持ちで接し、やがて虐待などの不適切なかかわりに繋がってしまうのではないかと危惧しています。

「言うことをきかせたい欲」を手放した時、それはやって来た。

しかし同時に、私は「言うことをきかせたい欲」を手放した時に、どんなことが起こるかも少し知っています。

これも、児童養護施設職員だった頃の話です。

幼児フロアの居室では、就寝時、20名近くの子供達が大きな部屋にズラッと寝ていて、宿直者は夜中に仕事が終わった後、子供達の布団の端に寝転んで、仮眠をとりました。一応宿直室で仮眠が取れる環境はありましたが、早く起きた子供達が歩き回って何するかわからない(言うときかせないといけない!)、と思うと、私は子供達の部屋と一緒に

寝ている方が気楽だったのです。

子供達の起床時間は朝6時半でした。しかし、当然ながら、6時前から起き出す子供達がいるのです。職員になってすぐの頃は、子どもがのそっと起き出したら、その子のそばまで行き、耳元で「まだ寝てなさい、起きる時間まで静かにしていなさい」と、小声で伝えていました。

そのうち、2人、3人と起き出します。おしゃべりしたり、おもちゃを出したり、部屋から出ていこうとします。私はその度、その子どものかたわらに行き、「〇〇しちゃいけないよ」「まだ静かにしないと、寝てるお友達がいるよ」と行動を制していました。

今考えれば、すでに目を覚ました子供達が、静かに布団の中で寝転んで、数十分過ぎせるはずがないのです。遊びたいにきまっています。さらに私という大人があっちにうろうろこっちにうろうろしているのです。動き出すなという方が無茶でしょう。

でも、当時の私はそれに気づけなかったのです。6時半までは静かにさせないといけない、他のフロアの子供達に迷惑をかけちゃいけない、6時半に早朝勤務の先輩職員が来るまでは、ちゃんと静かにさせておかないと、「何やってんだよ西川…」と思われるに違いない!というわけのわからない脅迫観念で動いていました。

ある宿直勤務の時、夜中に何かトラブルがあって、その対応に追われ、一睡もせずに宿直明けを迎えた事がありました。疲れた。せめて30分、いや20分でもいい、仮眠を取りたい。しんどい。考える力がない。

しかし、そんな時に限って、早く起きる子ども達。何とかしなきゃ、とは思うけど、なにせ眠い。しんどい。一秒でもいいから、横になりたい。

「……あー！もー、いい！」

ストーブもない、刃物も引き出しにしまっている、台所の入り口のベビーゲートの鍵も閉まっている、最低でも事故は起こらんやろ…眠い…！となった私は、ドアが一番近い布団の上に寝転びました。もう無理、私は無力！とあきらめてしまったのでした。

すると、いつもはウロウロと動き回る早朝起床チームの子ども達が、急に私の周りでゴロゴロ寝転がり始めたのです。

2～3歳のかわいいかわいい幼児さんたちです。一緒にゴロンと寝転んで

「てんてえ・・・♡」

と舌足らずに甘えてくっついてきます。なんてかわいい。天使か。

「てんてえはあ、ねむいねん。いっしょにゴロンしようねえ・・・。」

語彙力が低下した頭で、答えます。部屋はまだ早朝で、多くの子どもは眠っており、とても静かな環境です。

こっそりドアを開けて外に出ようとしている子どもに、私は寝ころんだまま、

「○○ちゃん、ねー、いっしょにゴロンしようよー…」

と声をかけると、のそのそやってきて、私にくっついて寝転びました。からだの右と左に子どもを侍らせて、ゴロゴロしながら過ごします。

「ふふふ、なんかいいねえ…」

子どもとにこにこ笑い合いながら、まどろみました。こんなに密に、少人数の子どもと静かに過ごせるなんて、普段のあわただしい幼児フロアの生活には、まずめったにないことでした。私も、そしてその子どもたちも、穏やかで豊かな気持ちで、一緒に時間を味わっていました。

なんのことはない、私がばたばた動かないことで、場が落ち着いたのでした。結果的に、6時半まで、皆で静かに過ごすことが出来ました。そしてそれは、夢のように幸せな時間でした、

私は「思い通りに、静かにさせよう」と思い過ぎてた自分に、やっと気付いたのでした。

それから先、「どうにでもなるやろ」と思って、場のコントロールを手放した時、このような奇跡のようなことが起こる経験を何度もしました。もちろん手放せるような環境を整えておいたり、手放しても大丈夫な子ども達だと見極めたり、最終的に何かあった時には私が責任を取りゃいいだけだと腹をくくったり、といった準備はしましたが、その上で、手放した時に、思いもよらない素敵なものが生

まれることはとても多いのです。

場を支配するのではなく、 場で共に過ごす

相手を統制していたい、思い通りに動いてほしい。そしてそれからはみだすものは、許せない。そういう場の作り方、関係性のあり方だと、その場の正解は、自分の決めた答えである1つのゴールしかありません。

しかし、実は、素敵な出来事や思いがけない出会いは、想定している範囲の外に、生成されがち、存在しがちなのです。だから場を信じて（信じられるように環境設定をして、どうにかなったらなった時のことだと腹をくくって）、手放す。その場にいる人たちと一緒に、これから起こることを楽しむ。そうすると、思ってもみなかった多様な状況に、場は開かれていくのです。

それは私自身がその場を支配する立場でなく、その場の人たちと共にいる、というところもちでいる状況で起きがちだということもわかってきました。

そして、保育者養成の現場で。

とはいえ、この感覚を、学生にどう伝えていけばよいのでしょうか。

「子ども達が自分の言うことを聞いてくれる」ことを命題と考えず、「子どもと共に、何にたどり着くかわからない未来を楽しみにする」、その豊かさを理解できるようにしてほしいと思う私もまた、学生を思い通りにさせたいと思っているだけ、と言えるのかも。

うーん、この欲望はなかなか手ごわいんです。どう付き合っていけばいいのでしょうか。

まずは学生と共に居る場と、そこにいる学生の力を信じて、手放してみます。